

氏名	佟 君
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1453号
学位授与の日付	平成8年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	子規文学の思想と精神
論文審査委員	教授 工藤 進思郎 教授 下河部 行輝 教授 松永 昌三 教授 石田 米子

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本の近代文学樹立のために多大な貢献をした正岡子規を取り上げ、その文学者としての思想と精神について、以下の5章にわたって論述したものである。

「第1章 子規の文学論」では、「所謂文学」「美の標準」「短詩滅亡論」の3節にわたって、子規の文学論の特質について探究した。第1節は、子規が「文学」をどのように認識していたかを探ったものである。文学というのは誇張的なもので、しかも政治・道徳・法律・経済などに決して左右されないものと子規は主張する。また文学は個人と国家のどちらにとっても有用な存在であることを指摘するとともに、文学を美術の一種と見なして、教育とくに美育と気育の重要性を説き、文学が人間の感情に訴えて快楽を齎らすものである点を強調している。第2節では、文学を美術の一種であると規定する子規が、「美」の標準をどのように見定めようとしていたかについて考察した。第3節においては、ハーバート・スペンサーの進化論的思惟に基づく心力省減説や数理上の錯列法をもって、明治時代に短歌・俳句のような短詩型文学は終焉を迎えると、子規が宣言したことの意味について考察した。短詩型文学に複雑な思想や感情を盛り込むには無理があるといった論調は、すでに『新体詩抄』や『小説神髓』にも現われていたが、近代短詩型文学とくに俳句の命運に強い危機感を抱くことで、新体詩の創作や俳句・短歌の革新に着手するに至ったところに子規の真骨頂が認められるのである。

「第2章 子規の俳論における芭蕉と蕪村」は、「子規の芭蕉受容」「子規の蕪村受容」「芭蕉の帰俗と蕪村の離俗及び子規の志向」の3節にわけて考察した。第1節では、子規が単に芭蕉批判を行っただけでなく、芭蕉を継承した面もあることを指摘した。発想および形式両面からの換骨奪胎の方法を用いて、子規はしばしば芭蕉の発句を模倣している。具体的には高浜虚子選『子規句集』から選んだ子規の句を取り上げ、意味・構造の両面から芭蕉の句との比較・分析を行った。子規の句「山吹の花くふ馬を叱りけり」が、芭蕉の「道のべの木槿は馬にくはれけり」の句を受容して成ったと見たのはその1例である。こうした方法については子規自身、明治31年の「蕪村と几董」において、蕪村の句「折釘に烏帽子かけたり春の宿」と几董の句「正月や烏帽子かけたる木工頭」について、「同一の材料又は語を主眼として二様の句作あるは之を比較して研究するに極めて利あり」と述べている。第2節においても、芭蕉の場合と同じく意味的あるいは構造的に子規の句に見られる蕪村句からの換骨奪胎法を分析するとともに、さらに子規文学の美意識面での蕪村へのアプローチに関して追究した。子規は蕪村の俳諧が積極的・客観的で複雑な美を有している点を高く評価するとともに、王維に対しても深い関心を寄せており、蕪村と子規との関係は、詩歌と絵画の両面において王維の存在を抜きにしては考えられない。第3節では、芭蕉と蕪村の芸術的立場の違いを示す言葉として、芭蕉の「高く悟りて俗に帰るべし」(「赤冊子」)と、蕪村の「俗語を用ひて俗を離るゝ」「俗を離れて俗を用ゆ」(「春泥句集

序」)等を取り上げて論じ、芭蕉の帰俗と蕪村の離俗の両面を兼用したところに子規俳句の特徴が認められるとした。

「第3章 詩人としての子規」では、「漢詩創作と離俗情趣」「子規と蕪村における王維 曩眞」「新体詩の試作と蕪村の俳詩」の3節にわけて、子規の詩人としての創作活動(漢詩・俳句・短歌・新体詩)と蕪村の俳体詩を取り上げ、子規文学の根底をなす詩歌について分析した。第1節においては、子規の詩作を分析しつつ、その離俗的趣味について具体的に指摘した。第2節では、蕪村の「終焉三句」中の第1句「冬鶯むかし王維が垣根かな」をもって問題提起するとともに、蕪村の発句および俳体詩と王維の詩作を比較して両者の相関性について論述した。一方、子規も明治30年の「俳句と漢詩」においては王維の詩を俳句に訳すことを試みている。すなわち、子規も蕪村も共通して王維への関心が強かったのである。第3節では、俳句革新の過程において子規が新体詩の創作に手を染め、日本風な押韻を試みたことの意義について考察するとともに、蕪村の俳体詩にすでにその先蹤が認められることを指摘した。

「第4章 子規文学の写生思想」では、「絵画的思考法」「写生説の源流」「写生説の特性」の3節にわたり、子規の写生思想の背景と特性について考察した。まず第1節において、幼い頃から画家になることを志していたという子規の絵画的思考法の特徴について論じ、第2節および第3節では、そのような思考法を持っていた子規が、同時代の画家たちのスケッチ論に啓発されつつ、子規自身の写生理論を形成していく過程を、その言説に照らしながら考察した。子規の説くところは概ね西洋の写生説を肯定しているが、自然をありのままに写すことを強調して客観的な美を重んじたところには、東洋の漢詩や絵画、とくに王維や蕪村からの影響が看取されるのである。

「第5章 紀行文と死生観」は、「子規の紀行文と芭蕉の紀行文」および「子規の死生観」の2節から成る。前節では、子規と芭蕉の紀行文を取り上げて比較・考察を試みた。例えば明治25年に成った子規の紀行文「旅の旅の旅」には、芭蕉の「奥の細道」などを踏まえた表現も散見されるが、概して子規には芭蕉のような旅に寄せる悲壮感は希薄で、むしろ旅そのものを楽しんでいるごとき趣が見てとれる。芭蕉の紀行文が適所に発句を配置した典型的な俳文であったのに対して、子規の場合は俳句はもとより漢詩文・短歌・英文詩等をも自由に書き込んでおり、構造・内容ともに両者の相違の方が目立つのである。次に後節では、若くして不治の病に罹った子規の死生観について考察した。本格的な闘病生活に入った明治28年は、同時にまた子規が文学改革を始めた年でもあった。「吾等が受くる楽みは／今の今なり 今を置きて／思ひ出すべき昨日なく／推し測るべき明日も無し」(明治29年)と歌った子規にとって、限られた命を精一杯に文学のために捧げて生きたことの意味は大きい。

論文審査結果の要旨

本論文の筆者は、中国のハルビン師範大学・黒竜江大学大学院を経て、平成元年4月から岡山大学文学部研究生となり、翌年には同大学院文学研究科(国文学専攻)に入学、赤羽学教授に就いて俳文学の研究に従事した。修士論文は「正岡子規における芭蕉と蕪村」であった。平成5年4月、文化科学研究科博士後期課程(人間社会文化学専攻)に入学後も、修士論文以来のテーマである正岡子規研究に精励した。その間、論文「正岡子規における写生説の特性」を『岡大國文論稿』第22号(平成6年3月)に、同じく「正岡子規の死生観」を『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』創刊号(平成7年3月)に掲載するとともに、「正岡子規の古典摂取の方法」(岡山大学言語国語国文学会、平成3年7月)、「子規の〈月給四十円〉の一解釈」(東京子規研究会、平成6年10月)、「大江健三郎と子規」(同、平成7年5月)等の口頭発表を行っている。このたびの学位論文は、修士論文を全面的に見直すとともに、これらの発表やその後の研究成果を大幅に取り入れながら、新たに書き下ろされたものである。

さて本論文は、正岡子規の漢詩・新体詩・俳句・短歌・写生文とその文芸理論に関する多角的な考察をとおして、主に芭蕉と蕪村の俳文学や東西にわたる外国文学の受容とそれらへの批判とが、子規によってどのようになされているか、その様態を全5章にわたって考察することによって、日本近代文学の基礎を築いた文学者としての子規の思想と精神の解明を試みたもので、400字詰原稿用紙に換算して600余枚に及ぶ。来日後、本格的に近世

の俳文学や子規の研究に取り組むようになって7年目に成ったものである。その間、講談社版『子規全集』をはじめ、芭蕉・蕪村・王維らの難解な作品と格闘しつつ、一方では諸家の手になる膨大な研究資料にも丹念に目を通して言うまでもない。先行の研究に導かれたところも決して少なしとしないが、それらへの批判や反論も的確になされており、また子規の漢詩や写生思想について論じた部分には筆者の新見も見受けられるほか、子規の新体詩における押韻を取り上げて考察した点などは、とりわけユニークな研究と考えられる。ともあれ、原文にあたって厳密な解釈と精緻な考察を施し、それらに基づいて着実に論述を進めていく本論文の方法は、紛れもなく筆者自身が試行錯誤を繰り返した末に獲得したものほかならず、1人の自立した研究者としての筆者の力量・能力を十分に証するにたるものと言わねばならない。

平成8年2月1日に開かれた学位審査会では、論文中の用語にやや厳密を欠くものがあることや、先行研究に関わる注記を各章ないし各節の末尾に一括して付すことをしていない点などが指摘された。そのほか、論文中の文章表現についても、なお何ほどの推敲の余地が残されており、本論文の公刊にあたっては、これらの点を修訂する必要があると考えられる。しかし、上述のような理由から、審査員一同、本論文をもって博士の学位に値するものと認定した。